第 264 回研究報告会（10 月 29 日）
親について：Manji 事例から

堀内みどり

「代理出産 赤ちゃん出国できず」というニュースが日本で報道されたのは 2008 年 8 月のことだった。近年、代理出産が容認されているということで国内外から注目されるインドでの出来事である。日本人夫婦と代理出産契約を結んだインド人女性が第三者から提供された卵子と夫の精子で女児を出産。女児は Manji と名付けられた。インドでは依頼夫婦が養子縁組をして引き取ることになっているが、日本人夫婦は出産前に離婚したため、女児の両親が確定せず、出国できない状態となった。この「Manji 事例」から、生殖補助技術（代理母）と親について、グローバル化する生殖ツーリズムの観点から、①依頼者と代理母の経済格差（国／個人）、②精子／卵子／子宮の商品化、③コーディネーター（医師・産院を含む）の役割、④法律／倫理／ジェンダーなどについての議論の必要性が強く感じられたこと、また、①「親」のイメージは共有できているのか、②「親である」ことと「親となる」ことの相違の認識から議論を深めることの重要さについて報告した。

日本爬虫両棲類学会第 52 回大会への参加と発表

佐藤孝則

11 月 2 日と 3 日の両日、東海大学札幌校舎で標記第 52 回大会が開催された。筆者は、「墜落わなを用いたエゾサンショウウオの活動性解析」と題して口頭発表をおこなった。

このなかで、筆者は環境省が『レッドリスト』で唯一「情報不足」とし、北海道が『レッドデータブック』で「留意種」に指定した貴重なエゾサンショウウオの生態調査では、「墜落わな調査法」が最も有効であることを実証した。調査は、1991 年から 1997 年までの 7 年間、4 月から 11 月までの毎月下旬、北海道帯広市の「若葉の森」で 3 日間連続して実施した。

これまで、小型サンショウウオにおける非繁殖期の生態調査は、夜行性の彼らを容易に捕獲できないことから研究手法としては確立されておらず、むしろこの時期の生態調査は不可能と考えられてきた。しかし、1991 年に筆者が開発したこの調査法が小型サンショウウオの生態を解明するには有効であることが、既にキタサンショウウオでの生態研究で実証されていたことから、今回はエゾサンショウウオでの研究成果を発表する場となった。

第 265 回研究報告会（11 月 28 日）
オーストラリア留学生活報告

土井幸宏

2008 年から 5 年間、豪国での留学中に体験したことについて報告した。主な活動場所は ACT（キャンベラ）と NT（北部準州）であった。豪国立大学のある ACT には、ほかにもキャンベラ大学や国立の研究機関が多く集まるところである。生活費は高額で、冬は長く厳しいものの、勉学にはふさわしい環境であった。研究作業以外には、アボリジニ音楽や日本音楽（雅楽や天理教音楽も含む）のチューターを務めたり、地域の歌舞伎や姉妹都市奈良祭りの手伝ったりした。天理にもお連れした NT 出身のワルピリ族長老ジャンピジンパ氏との出会いは、論文作成以外にも大きな意義があった。同氏が中央砂漠で一夫多妻制を生活をしていること、シドニーで催された盛大なゲイパレード・マルディグラを見学したこと、10 月に ACT で同性婚が認められるようになったことなど、豪国の結婚制度の多様性は、留学中、自分の人生観に最も影響を与えたものである。

日本生命倫理学会公募シンポジウムで発表

金子　昭

第 25 回日本生命倫理学会大会が 11 月 30 日と 12 月 1 日の両日、東京大学を会場にして開催された。本研究所からは、深谷忠一所長、堀内みどり研究員と金子昭が参加した。今大会のテーマは「死生学と生命倫理」。金子は、2 日目の公募シンポジウム 10「宗教の死生観から問う現代日本の生命倫理問題」で、パネリストの一人として発表した。この公募シンポジウムは、これまでにも教団付置研究所懇話会生命倫理研究部会（本研究所はオブザーバー会員）の有志が応募してきているもので、今回で 5 回目になる。今回は約 80 名が参加して会場はほぼ満席、幾つかの宗教系新聞も取材に来ていた。

最初に、浄土宗総合研究所の吉田淳雄氏がオーガナイザーとして趣旨説明を行った。今回のシンポジウムは、2009 年と 2013 年に行った同研究所による生命倫理についての教団アンケート、『中外日報』の宗教者アンケート（2012 年、2013 年）などの結果に基づき、3 つのテーマ（出生前診断、終末期医療、再生医療）に関する日本の宗教教団の見解を紹介し、それを死生観という観点から論じるというものである。

第 1 の発表者は宗教情報センターの藤山みどり氏。藤山氏は、「出生前診断をめぐる宗教的死生観と宗教の役割」というタイトルで発表した。原則論では「いのちの尊重」を強く進めつつ、現実論ではやむをえない場合は中絶も認めるが、その場合はケアや教えで対応するという宗教界の現状を報告した。

2 番目に、オーガナイザーでもある吉田淳雄氏が、「終末期医療における『事前指示』と宗教的死生観」というタイトルで発表した。延命医療の中止・差し止めには宗教界では賛否両論があるものの、「終活」やエンディングノートについては概ね肯定的である状況が示された。

3 番目の発表は金子が担当。「再生医療を考える―宗教的死生観及び宗教的生命倫理の視座」と題して報告した。日本の宗教が共有してもつ死生観を「いのち」観と定義した上で、その観点から見て、iPS 細胞の臨床応用については、疾病の治療に役立てることは評価するものの、生殖医療の方面への活用には強い懸念が見られると指摘した。

以上 3 名の報告の後、フロアを交えてのパネルディスカッションが行われた。「宗教界の考えを社会に発信することをどう見るのか」、「宗教による科学技術社会論の可能性をどう考えているか」、「医療技術の発達に応じて、宗教の存在意義も変わるのではないか」等の質問がフロアからなされ、活発なやり取りが行われた。